

## 2022 年度夏期コース報告

橋本佳子、佐藤有理、加藤陽子、川西由美子  
河野多佳子、後藤恵利、城佳子、本間光徳<sup>1</sup>

### 1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUC）では、40 週間の通年コースとは独立して7 週間の夏期コースが設置されている。本年度は2022 年6 月23 日(木)より2022 年8 月10 日(水)まで実施した。修了者は31 名<sup>2</sup>で、そのうち博士課程在籍者が7 名、修士課程在籍者が11 名、学部在籍者が3 名、その他10 名であった。

本稿では、2 章で本年度の夏期コースの特徴、3 章で正課活動、4 章で準正課活動と課外活動、5 章で受講者による評価について報告する。

### 2 本年度夏期コースの特徴

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、IUC 夏期コースは2020 年度よりオンラインによる遠隔授業を実施してきたが、本年度も3 月中旬にオンライン開催を決定した。入国制限緩和が進む中、対面での授業再開を目指し準備を進めていたが、外国人の新規入国制限の完全撤廃が見込めず、やむを得ない決断となった。IUC では遠隔授業のコース設計や運営に関する知見が蓄積されており（佐藤他 2020、結城他 2020、千田他 2021、大橋 2021）、オンライン体制への移行は比較的円滑に行われた。

コース期間中を通して固定のメンバーで実施されるクラス授業の活動を補完し、受講者間の交流と授業外での日本語使用を促進するため、準正課活動としてクラブ活動、講演会を実施した。また、課外活動として、希望者にグループ漢字学習、会話パートナーとの会話の機会を提供した。さらに、オンラインビデオ通話スペース Gather.Town<sup>3</sup>を利用し、受講者が24 時間自由に入出入りできる談話室を設置した。この談話室は、IUC レギュラーコース卒業生との交流の場である「ようこそ！先輩」（コース期間中2 回実施）、全受講生が1 対1 で主任と話す場である「主任面談」（1 回10 分、2 回実施）でも用いられた。

### 3 正課活動

本章では、3-1 でクラス授業、3-2 で個人授業の概要について述べる。

クラス授業は Zoom<sup>4</sup>をプラットフォームとして、月曜日から金曜日の 8:30 から 11:20（1 限 8:30-9:20、2 限 9:30-10:20、3 限 10:30-11:20）まで実施した。指導内容と教材は

クラスによって異なるが、全クラスで『待遇表現』<sup>5</sup>の指導を実施した。また、IUC のレギュラーコースでは 2020-2021 年度より学習管理システムの一つである Google Classroom<sup>6</sup> が導入され、学習資料の管理がしやすくなっていることから、今年度の夏期コースでも 6 クラス中 4 クラスがこのシステムを取り入れた。

個人授業は受講者の都合に合わせてクラス授業の時間の前、あるいは後に週に 1 回 40 分間行われた。

### 3-1 クラス授業

#### 3-1-1 夏海クラス

##### 【人員概要】

担任：本間光徳、副担任：千田昭予、白石恵利奈

受講者 6 名：修士課程 3 名(自然科学 1 名、社会科学 1 名、文学 1 名)、学部卒 1 名、学部 2 名(情報科学 1 名、東洋学 1 名)

##### 【コース目標】

##### A. 読む

- ・多様なテーマ・ジャンルの文章が読める。
- ・使用されている語句や表現から、テーマに対する筆者の立場を理解することができる。
- ・表現のかたさややわらかさを理解し、想定される読者を想像することができる。

##### B. 聞く

- ・ニュースなどが聞き取れ、理解することができる。
- ・間のとり方、イントネーションによる発話者の意図を理解することができる。

##### C. 話す

- ・発音練習を反復し、より自然な発音を身につける。
- ・学術発表、ビジネスの場などにふさわしい話し方ができる。
- ・相手の質問や意図を理解し、適切な応答ができる。
- ・他者に配慮した発話ができる。

##### D. 書く

- ・文章中の語句を用いて内容をまとめることができる。
- ・文章中の語句や構文を用いて作文ができる。
- ・プレゼンテーションスライドを書くことができる。
- ・比較的フォーマルな E メールを書くことができる。

表1 夏海クラス時間割

	月	火	水	木	金
8:30- 9:20	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現	待遇表現
9:30-10:20	読解	ニュース	読解	ニュース	発表・議論
10:30-11:20	発表・議論	文法	発表・議論	新聞	クラブ活動/ 講演会

## 【主要教材】

目黒真実 (2010)『上級学習者のための日本語読解ワークブック』アルク

## 【コメント】

センター作成の『待遇表現』を徹底的に使用し全ユニットを学習、コース初日より口頭発表会を意識させ、期間中『待遇表現』の定形表現を積極的に使用させた。毎回1限を「待遇表現」とすることによりコースの一貫性を確保し、テキスト内容の7割程度以上を消化した。事前学習として、たとえイントネーションに自信がなくても、最低限「教科書を見ればできるようにしておくこと」を宿題とし、クラスでは殆どの時間をペアワークに費やした。授業時間の最後には、相手を見て「臨機応変」の対応ができるように練習させた。コース途中で、事情により1名が出席不能となり、奇数人数でのクラス運営となった。対応として、ロールプレイではブレイクアウトルームの使用を極力控え、全員集合中に無作為に相手を指名して話しかけさせ、話しかけられた側が臨機応変に対応する形式を採った。

2限は、月、水曜日に「読解」、火曜日に「ニュース報告」と「文法」、木曜日に「ニュース報告・表現」と「新聞」を設定した。

3限は、月、水曜日に「発表・議論」とした。即ち、2限で扱った内容に基づき3限で議論をする流れである。火曜日と木曜日はそれぞれ2限同様である。

各授業で扱う内容は、外部講師による講演会や夏草クラスとの合同授業、所長との交流などイベント性のある活動の内容を予め把握し、それらの活動で想定される話題や使用語句に慣れさせた。特に本年は沖縄返還50周年でもあり、合同授業で沖縄を扱うにあたり、「新聞」の授業で沖縄の新聞を教材として使用した。また、日本舞踊や能の講演の前には「読解」で伝統工芸を扱い「発表・議論」で伝統という概念を議論している。更に、アサーティブネスの講演の前には「新聞」でいじめ問題を扱った。即ち、各授業は毎回完結するが、それぞれが関連しており、学習者には習得した知識や技術を活用させることを意図した。

本年度の特徴として、受講生の研究経験の浅さと体系的日本語学習歴の少なさが指摘できる。受講生が自身の理想とするところと現実の差異に当惑することが多々認められた。特に待遇表現に於いてはペアワークの相手があることなので十分な予習を要求し、受講生もその必要性を理解したが、現実問題として予習が不十分な場合が多く認められ、定着も芳しくなかった。また、口頭発表会の発表内容検討の段階でも、アイデアは多く出るがま

とまらない傾向が強かった。しかしながら発表に関する技術的側面の向上は顕著であった。各受講生に於いては学習意欲が高く保たれ、諸般の事情を考慮すると、コース前後の向上幅は大きかったものと思われる。

### 3-1-2 夏草クラス

#### 【人員構成】

担任：川西由美子、副担任：結城佐織

受講者6名：博士課程3名、修士課程1名、学部生1名、社会人1名

(近代日本文学1名、近代アジア文学1名、歴史学1名、美術史1名、生態学1名)

#### 【コース目標】

##### A. 総合面

- ・具体的、及び、抽象的な観点で情報を把握し、表現することができる。
- ・話題や論点などに一貫性を持たせることができる。

##### B. 読む

- ・多様なテーマ・ジャンルの文章が読める。精読・速読ができる。
- ・筆者の意図を理解し、構成を意識しながら、次の展開を予測しながら読むことができる。

##### C. 聞く

- ・ニュースや発表などが聞き取れ、理解することができる。
- ・日常的なやり取りや討論で相手のニーズ・要点などを聞き取ることができる。
- ・発音・イントネーションなどを聞き取り、活かすことができる。

##### D. 話す

- ・目的に応じ機能的に適切な表現、相互作用・談話管理（発言権の適切な取得や裏付け部分と主要論点の区別をつけるなど）のストラテジーを使うことができる。
- ・自分の経験を簡潔に雑談形式で始めて、一定の長さ続けて終えることができる。
- ・相手の意見をまとめたうえで、自分の意見を簡潔に述べるができる。
- ・適切に問題提起ができる。叙述・描写をすることができる。

##### E. 書く

- ・幅広い話題について目的に応じて適切な語彙・表現を使い、まとめることができる。
- ・構成と議論の掘り下げ（因果関係、比較等）により一貫した文を明瞭に書くことができる。

表2 夏草クラス時間割

	月	火	水	木	金
8:30-9:20	読解	読解	読解	読解・文法	表現クイズ 読解議論
9:30-10:20	文法	発表・議論	発表・議論	文法	ニュース報告 待遇表現
10:30-11:20	スピーチ 待遇表現	スピーチ 待遇表現	ニュース報告 待遇表現	スピーチ 待遇表現	クラブ活動 /講演会

## 【主要教材】

近藤安月子他 (2006)『上級日本語教科書文化へのまなざし』東京大学 AIKOM 日本語プログラム

文藝春秋オピニオン (2022)『2022年の論点100』文藝春秋

## 【コメント】

今年も遠隔授業となり、受講者所在地の時差を考慮し時間割を決めたところ、効果的であり受講者にも好評であった。受講生は6名で自発的な発言が少なく、議論を深めることが困難であったが、ブレイクアウトルームを活用し、時間を長めに取り、深く議論できるようにした。クラスメートと親しくなるように「出来レポ」という毎日の出来事を雑談形式で1分以内に話す活動を取り入れた。「出来レポ」は担任担当で定期試験にも出題された。授業の回を追うごとに述べる意見文も複雑になり、学習した表現を使う積極性が見られた。受講者同士は徐々に親しくなり、発言も増えた。実際に主任面談記録によると、発話時に緊張しなくなった、話せるようになってきたなどの声があった。遠隔授業のため講座途中で訪日などの移動(2名)が見られた。

「海の日」の祝日やクラブ活動、講演会で例年より授業数が減ったため、授業計画の時間配分に工夫をし、詰め込みすぎないようにした。クラブ活動は他のクラスの学生とも交流できると好評であった。今年も昨年度同様、夏海クラスとの合同授業を2時間行うことができた。クラス分けの段階で夏海と夏草の会話力の差が懸念されていたが、実際には問題なく充実した時間になった。話し合いのトピックは「沖縄か琉球か」「日本人とは」で、沖縄返還50周年の今年、沖縄独立などに関する問題を考えることは意義深かった。夏草受講生は感想として、有意義であった、緊張したが夏海の受講者の流暢な日本語を聞いて刺激になったと述べている。また、今年は所長との交流もあり、敬語を使う機会になった。

1 限目は読解の時間に充て、読み物のテーマは受講生の生活に関連したものや学術的に研究されたもの(翻訳、心理学、社会学など)を選び、受講生に選択させた読み物(文藝春秋オピニオン『2022年の論点100』など)も扱った。2 限目は文法、発話練習、討論に充てた。文法の時間は文法テキスト『日本語文法演習 一複文一』<sup>7</sup>を使った。また、受講生のニーズに合わせてセンター作成の「文法ノート」も使った。3 限目は2分スピーチ・

ニュース報告に20分、センター作成の『待遇表現』に毎日30分確保した。『待遇表現』は、補足説明（イントネーションなどの言い方の注意事項提示）をしながら、ある程度自然な脱線などへの対処も練習した。

毎日の文法課題はGoogleフォーム<sup>8</sup>で繰り返し復習を可能にし、中間・期末対策にも活用できるようにした。実際に受講者も複数回活用していた。中間試験後に、それまでに努力したことと後半に努力したい目標を書かせた。期末試験後にも同じように書いて自己分析をさせた。これは受講者それぞれの自覚を促す目的で行われ、主任面談記録にあるように受講者からは満足の声が多かった。今後の日本語学習の方針などは個人授業や個人面談などで助言した。期末発表は中間試験前にトピックと一段落の要旨を提出させ、それ以降、毎週、初稿、書き直し、最終稿と進め、クラス内リハーサルもスライドを見せながら行う全体リハーサルと部分ごとにも行なった。発表の発話発音練習は個人授業の最終回を活用した。

### 3-1-3 夏空クラス

#### 【人員構成】

担任：加藤陽子、副担任：高橋佳奈子

受講者4名：修士課程修了1名、修士課程2名、博士課程1名

（歴史学2名、日本研究2名）

#### 【コース目標】

##### A. 読む

- ・効果的に読むための手がかりを知り、読み物に書いてある情報が正しく理解できるようになる。
- ・論理的文章の構成を知り、学術論文を読むための基礎となる表現や文型が理解できるようになる。

##### B. 聞く

- ・ある程度の長さを持つニュースや口頭発表などを聞き取り、理解できるようになる。
- ・日常的な会話やディスカッションで、相手の話の要点を聞き取れるようになる。

##### C. 話す

- ・情報をわかりやすく伝えることができるようになる。
- ・人間関係や場面・内容に合った話し方ができるようになる。
- ・聞いたり読んだりして得た情報をもとに、あるテーマについて説明したり意見を述べたりすることができるようになる。

##### D. 書く

- ・適切な文法や表現や語彙を使って、内容や用途にふさわしい文章が書けるようになる。

表 3 夏空クラス時間割

	月	火	水	木	金
8:30-9:20	文法 (漢字)	文法 (漢字)	文法 (漢字)	文法 (漢字)	文法・読解復習 (漢字)
9:30-10:20	読解	読解	読解	読解	待遇表現復習 ニュース報告
10:30- 11:20	待遇表現 会話	待遇表現 会話	待遇表現 会話	待遇表現 会話	クラブ活動 /講演会

## 【主要教材】

友松悦子・和栗雅子 (2004) 『初級日本語文法総まとめポイント 20』スリーエーネットワーク

アカデミック・ジャパニーズ研究会編(2015)『改訂版 留学生の日本語 読解編』アルク

## 【コメント】

文法は、内容的には学生にとって既習項目であるが、予習・授業後の課題で多くの練習問題にあたり、しっかりした土台を作るよう努めた。漢字は、センター作成の『Kanji in Context』の web 版<sup>9</sup>を使い、15 課までの復習を繰り返し行った。読解は論理的な文章が読めるようになる基礎を作るものであったが、語彙や漢字の難しさがあり、文法ほど楽ではなかった模様である。待遇表現は基本会話がスムーズに言えることを目指した。基本会話を応用した会話はあまりできなかったが、読解の話題に沿ったテーマでの会話練習では、活発に説明したり意見を交換したりする姿が見られた。新聞・ニュース報告は副担任が担当し、学生の発表・質疑応答・話し合いなどの活動が行われた。この他には、アカデミックスキルとして、発表レジュメの書き方、質疑応答で使うフォーマルな表現、フォーマルな自己紹介などの練習を行った。また、所長との交流の機会があり、学生が一人ずつ所長撮影の写真に関する質問をした。

授業後の毎日の課題は、授業で扱った文法項目の練習問題 2 種類 (1 つは翌日締切、もう 1 つは 3 日後締切) と、文作成・読解・会話作成・短作文などの練習問題である。週末には長めの作文や卒業発表会の原稿の執筆・改稿を課した。

学生は真面目で、全員一日も休まず授業に参加した。クラスの雰囲気も良く、互いにアドバイスし合ったり助け合ったりして授業に参加していた。最終日の個人面談では、それぞれの学生が自分の日本語の上達した部分、これから改善したい部分について明確に把握していることがわかった。レギュラーコースへの入学、web での漢字学習の継続の希望について語る学生も多く、今後の日本語学習継続への意欲が示されたことがサマーコースの成果の一端を示すものであると考える。

### 3-1-4 夏鳥クラス

#### 【人員構成】

担任：後藤恵利、副担任：勝成仁

受講生：博士課程1名、修士課程修了3名

(考古学1名、美術史・建築史1名、地域研究1名、日本語1名)

#### 【コース目標】

##### A. 読む

- ・新しい語彙や文型表現を学ぶ。
- ・短い新聞記事や論説文を読めるようになる。

##### B. 聞く

- ・自然な速さの日本語を聞き取る力をつける。

##### C. 話す

- ・自分の意見を分かりやすく相手に伝えられるようになる。
- ・場面や相手に応じて、適切な表現が使えるようになる。

##### D. 書く

- ・話し言葉と書き言葉の使い分けができるようになる。
- ・読んで理解したことや自分の意見を簡潔に書けるようになる。

表4 夏鳥クラス時間割

	月	火	水	木	金
8:30-9:20	読解	読解	読解	読解	読解
9:30-10:20	読解 話し合い	読解 話し合い	読解 話し合い	読解 話し合い	読解 話し合い
10:30-11:20	文法	文法	待遇表現 ミニ報告	待遇表現	クラブ活動 講演会

#### 【主要教材】

清水正幸・奥山貴之（2015）『日本語学習者のための読解厳選テーマ10 中上級』凡人社

#### 【コメント】

当クラスでは、担任が担当する月・火・金曜日を基礎固め（文法復習）、副担任が担当する水・木曜日を応用重視（ミニ発表、待遇表現）と位置付けた。毎日の読解以外は担当教師間で業務分担をしたので、学生も曜日によって何をすべきか把握しやすかったのではないだろうか。

当クラスでは、クラスノート（Google ドキュメント<sup>10</sup>）を使って情報共有に努めた。担当教師間でクラスノート用の目印（アイコン）を決めておき、クラスノートに統一感が出るように工夫しながらノート作りを行った。クラスノートは授業中画面共有し、学生が学

習内容（キーワード、解説、注意点、参考資料の URL 等）を常時確認できるようにした。なお、学生にもドキュメント編集権限を与え、宿題の短作文を事前に書き込ませた。

復習用に語彙クイズと文法復習クイズ（Google フォーム）を実施した。クイズは授業前に Google クラウドにアップロードしておき、任意受験とした。毎回欠かさず受験し、複数回繰り返して受験する学生もいた。

授業では、Zoom のブレイクアウトルーム機能を使用し、グループワークの時間を設けた。学生には各自事前準備したもの（読み物の内容まとめ、練習問題の解答）を基にワークに参加するよう促した。さらにメインセッションでグループ報告させることによって、クラス全体での情報共有を心がけた。

文法は、初級文法の中から特に間違いが多い項目を取り上げて復習を行った。併せて中上級レベルの用法も一部取り上げて練習を行った。

当クラスは、日本在住の 1 名を除き、3 名がアメリカ在住であった。オンライン授業のため、現時点の実生活で「待遇表現」を使った会話場面は少ない。そのため、「待遇表現」の授業では教科書に準じてメール指導を中心に行い、会話練習は教科書の会話例の中でも特に実用性の高いものに絞って行った。

読解の主教材を終えた後は、学生に自らが探して選んだ記事を 2 つずつ提供してもらった。一人 2 回ずつディスカッションリーダーになってもらい、話し合いを行った。偶然にも同じ記事を選んだ学生 2 人には 2 人でディスカッションリーダーになってもらった。2 人が事前に論点の整理を行ってくれたおかげで、有意義な話し合いになった。

非常に真面目で協力的な学生たちのおかげで、終始よい雰囲気の中授業を行うことができた。学生 1 名がプログラム開始早々体調不良のため 1 週間全休したが、復帰後は持ち前の明るさと勤勉さですぐにクラスに溶け込んだ。クラスメートも当該学生に対し、変わりなく接していたのが教師としても有難かった。

カジュアルとフォーマルを使い分けすることの重要性についてはどの学生もよく理解していたが、引き続き練習が必要である。文法の正確性を向上させること、今後の研究活動に向けて、簡潔で分かりやすい、かつフォーマルな話し方と書き方を身につけることが当クラスの学生にとっての課題である。

### 3-1-5 夏柳クラス

#### 【人員構成】

担任：城佳子、副担任：山口真紀、大橋真貴子

受講者 6 名：博士課程 2 名、修士課程 1 名、修士課程修了 1 名、学部卒 2 名

（東アジア研究 4 名、比較文学 1 名、機械工学 1 名）

## 【コース目標】

## A. 総合面

- ・総合的に日本語能力検定試験 N2 合格レベルに到達する。
- ・オンライン授業ではあるが日本語を学ぶコミュニティの一員として積極的に参加する。

## B. 読む

- ・多様な分野の、ある程度専門的な読み物の内容の要旨を掴み取ることができる。
- ・接続詞などの読む技術を意識化しながら読むことができる。
- ・小説を読むことを楽しむ。

## C. 聞く

- ・ナレーション・会話の両方の要点が理解できる。
- ・内容のある動画や講義などが聞き取れ、理解することができる。
- ・発音やイントネーションなどを聞き取り、活かすことができる。

## D. 話す

- ・相手と場面に合わせ、適切な流れのある会話ができる。
- ・討論の際、十分な事実の説明ができ、根拠が明確な意見が述べられる。
- ・自然な発音・アクセントに注意しながら話すことができる。

## E. 書く

- ・抽象的な概念について、構成が明確なまとまりのある文章を書くことができる。
- ・自分で自分の誤りを修正できる力を身につけることができる。
- ・待遇表現を使ったメールの書き方に慣れ、丁寧なメールが一人で書けるようになる。

表5 夏柳クラス時間割

	月	火	水	木	金
8:30-9:20	今日の一言 待遇表現	今日の一言 待遇表現	会話・文法	会話・文法	今日の一言・討論
9:30-10:45	読解・討論	読解・討論	読解・討論	読解・討論	発表・読解討論
10:30-11:20	スピーチ・ 討論	スピーチ・ 討論	スピーチ・ 討論	スピーチ・ 討論	クラブ活動・ 講演会

## 【主要教材】

友松悦子・和栗雅子 (2007) 『短期集中中級日本語文法総まとめポイント 20』スリーエーネットワーク

近藤安月子・丸山千歌 (2005) 『文化へのまなざし』東京大学 AIKOM 日本語プログラム

## 【コメント】

今年はプログラム開始前のクラス分けで境界線にいた学生の内、読解は強いが会話が弱

いと判定された学生を夏柳に集め、読解に基づいた話し合いの場を多く設けるといった流れになった。しかし、授業開始後すぐに学生それぞれが積極的に発言をするクラスであることが判明し、会話能力がみるみると伸びて行った。全体で話す以外には、当初から積極的にブレイクアウトルームを多用し、三人ずつ二つのグループでの討論、ペアでの内容確認、廊下でのおしゃべり再現を意識した教師なしの自由会話という5分ほどの会話時間など、発話の機会を頻繁に設けた。その功もあってかプログラム後半には「話す能力が伸びた」と意識した学生が多く見られ、こちらの意図とクラスのコミュニティがうまくかみあった結果となった。

授業の組み立てでは、担任が教える日(週3日)と副担任が教える日(週2日)とでは、授業内容に変化を持たせるものにした。クラス運営にはグーグルドキュメントのクラスノートと呼ぶファイルを共有し、担任の日には、ウォームアップのために「今日の一言」という5行の書き込みの宿題を課した。このテーマは学生が自由に選び、それぞれの日常生活の一コマを共有するものであった。学生からのテーマは軽くても書き込みのフィードバックは細かく行うようにした。発表はクラス内で学生に読ませ、質問やコメントなどの会話へと発展させ、そして教師は文法語彙表現などのフィードバックをした。「今日の一言」の後には、待遇表現の指導を行った。待遇表現は、オンラインでの日本語生活下での即戦力として、各ユニットのメールの書き方を全てカバーし、いくつかのユニットでは会話練習もした。教師側からの学生のメールの書き方の訂正が週を重ねるにつれて激減し、完璧というにはまだ程遠いものではあるが、最終的には一人で実践できるようなレベルにまで到達していたと思う。副担任の日の1時限目は「今日の一言」の代わりに会話でのウォームアップと文法説明に時間を充てた。文法説明は、基本としては、事前に教科書の練習問題を課し、質問があった問題についてクラスノートに書き込ませ、それを授業で説明をするという形をとった。同時に、クラス内での練習や重要事項の説明も行われた。問題点として浮かび上がったことは、質問が多く出て授業運営に支障をきたしたことである。担当教師によると、事前にクラスノートに書かれた学生の質問に対して「クラスで説明をするもの」「自分でクラスノートに教師が書き込んだ説明を読んで自習するもの」と分けて対処したようだが、その準備の際の教師の負担は大きかったようである。改めて、文法を担当してくださった副担任の先生方にお礼を申し上げたい。

授業の時間配分は、元気一杯な1時限目では、文法や待遇表現、書き込みへのフィードバックなどで50分授業。そして、読解と討論の2時限目は、休憩時間をはさまず75分間続けて行った。75分の授業では、20分から30分という長いスパンを使ってのブレイクアウトルームでの内容確認作業、また全体での話し合いなど、学生が積極的に発話することにこだわった。ブレイクアウトルームでの話し合いは3人ずつにすることが多かったが、教師は学生から求められなければ話し合いには参加せず、ノートを開いて学生の表現や語彙など、発話に注目して記録を取り、その時間の話し合いの終わりに全体に向けてフィー

ドバックを毎回行った。

読解では3週目に短編小説を2作品読んだ。一つは村上春樹「納屋を焼く」、もう一つは川上弘美「神様」だったが、特に「納屋を焼く」はミステリー的要素も強く、話し合いも盛り上がり、大好評であった。小説をもっと読みたいという声もあり、後半にもう1作品、多和田葉子「電車の中で小説を読む人々」も扱った。中間試験直後の週には、学術的なスキルを磨く、というテーマで、討論の仕方、パワーポイントの作り方を始め、研究者としての基本的な事項を確認した。そして、討論のためには動画「ドキュメント 72 時間」(NHK)<sup>11</sup>の一部を使って、コロナ禍の中、現代日本では人々がどんな暮らしをしているのか観察する機会を与え、意見を交換しあった。最後の2週間は、『文藝春秋オピニオン 2022年の論点 100』を使った。これは様々な分野の専門家が寄稿しているものだが、教材として長期的にも内容的にも大変使いやすい。キーワードから学生に担当を希望する記事を選ばせ、授業で扱うものを決めた。授業では担当学生が、事前に内容質問、ディスカッションポイントなどをクラスノートで共有し、討論の司会も自ら行った。この学生主導のカリキュラムも好評だったようだ。

またプログラム後半には、バートン所長との「交流の時間」が設けられたが学生には大好評であり、その翌週には急遽副主任の佐藤有理先生にも授業に来ていただいて「交流の時間その2」が行われた。自分達が普段練習している質問の仕方や丁寧な受け答えなどを試してみる貴重な機会となり喜ばしかった。

プログラム全体としては、多少のトラブルはあったが、終わってみれば全て些細なことであった。オンライン授業という特殊な状況の中、授業に関しては遅刻も欠席もなく全員が皆勤賞であったことは驚きでさえあるが、学生一人一人がマナーを守り、また雰囲気作りにも貢献して参加しやすいコミュニティであったからであろう。学生にとって日本語上達だけでなく、このオンライン授業が楽しい経験であったとしたらこの上なく嬉しい限りである。

### 3-1-6 夏山クラス

#### 【人員構成】

担任：河野多佳子、副担任：大橋真貴子、石川晶子

受講者6名：修士課程4名 学部卒2名

(伝統芸能1名、古典文学1名、国際関係1名、東アジア研究2名、芸術1名)

#### 【コース目標】

##### A. 読む

・中上級レベルの日本語教科書に加え、実際の新聞記事や一般書の一部を読み、内容を理解する。

- ・中上級レベルの語彙や文型が理解できるようになる。
- ・さまざまな書き言葉の表現方法に触れ、筆者の意図について考察する。

## B. 聞く

- ・インターネットニュースを聞き取り、内容を把握する。
- ・一般の人の話しことばに慣れる。
- ・話し合いの時に、クラスメートの発言を聞き、意図について深く理解する。

## C. 話す

- ・テーマに沿った話し合いで、自分の意見が言えるようになる。
- ・場面に応じた敬語表現を使って話す。
- ・自分の専門についてわかりやすく説明できるようになる。

## D. 書く

- ・400～600字程度の作文、エッセイが書けるようになる。
- ・自分の意見を、読む人にとってわかりやすくまとめる。
- ・読み物などで学んだ文型や単語を使用し、表現力を高める。

表6 夏山クラス時間割

	月	火	水	木	金
8:30-9:20	待遇表現 ニュース報告 (発表&話し合い)	待遇表現 写真会話	待遇表現 ニュース報告	待遇表現 写真会話 (発表&話し合い)	待遇表現 メールの書き方
9:30-10:20	読解	文法	読解(新聞、雑誌)	読解	文型・単語演習
10:30 -11:20	話し合い	文法 確認クイズ	話し合い	話し合い	クラブ活動 /講演会

## 【主要教材】

鎌田修・ボイクマン総子・富山佳子・山本真知子 (2012)『新中級から上級への日本語』The Japan Times

友松悦子・和栗雅子 (2004)『初級日本語文法総まとめポイント 20』スリーエーネットワーク

## 【コメント】

授業の柱は読解、文法、発表、待遇表現、ニュース報告とし、400字から600字程度の作文の課題を毎週末に課した。クイズは単語、文法いずれかを毎日行い積み上げを図った。

読解は中上級レベルでも読める長さの新聞や雑誌の記事、一般書の一部を取り上げた。授業準備として前日までに本文を読んで予習シートに答え、重要単語のクイズを授業開始時間までに完了することとしたが、学生達はコースを通して概ねこのペースを保っていた。

新聞、雑誌、一般書はできるだけ新しいものを扱うことにより、現在のリアルな日本に触れる機会とした。

文法は『初級日本語文法総まとめポイント 20』を使用し、間違いやすい項目を集中的に復習、練習をしたうえで理解を固めるよう指導した。当初学生は初級文法だからと余裕を見せていたが、あいまいな理解に留まっていたいざ使うときにいつも間違えてしまう点を指摘し、コースが終わるまでに初級の文法知識の取りこぼしがなくなるよう学生達に意識をさせた。コース後半に作文のミスを自分で直すという課題を与えたが、自分で文法の間違いに気づいて直せるようになった。

話す活動として『待遇表現』を使用し、場面別の会話練習をした。また前半の3週間の発表の前段階的な練習と位置付けた「写真会話」を行った。これは担当者が自分で撮影した写真1枚をクラスで共有し、写真に写っているもの、写っていないものについてわかりやすく説明をするという活動である。文字情報なしでどうすれば聴衆に興味を持ってもらえるか、話す順番や表現などの言語的な工夫について考察させた。後半は各自の専門について10分間の発表の機会を設けた。学生はディスカッションポイントを用意したうえで、リーダーとなって話し合いの進行をした。これはコース最終日に行われる発表会に向けての準備も兼ねており、学生は複数回に分けて原稿を提出、教師からの添削とフィードバック、クラスメートからのアドバイス等を受け、3週間かけてよりよいものに仕上げるといった流れで行った。第一稿の時点では、文字数の制限オーバーや、単語の選択の誤り、結論部分の曖昧さなど課題が山積し、発表者も自信を持てなかったようであるが、クラスメートからの具体的なアドバイスや誉め言葉を聞いて自ら改善する姿が見られた。クラスの半数以上を大学院生が占めていたこともあり、発表の仕方や流れについてはお互いに参考にしていたようである。今年の夏山クラスは控えめな性格の学生が多く、お互いに気遣う様子がよく見られた。しかし話し合いの時は教師が指名せずとも質問を積極的にし、沈黙の時間は少なかったように思う。学生の専門が多岐にわたっていたため、はじめは一方的に説明し、教わるという関係性であったが、次第に自分の知見をクラスで共有したことで、さらに他の学生から情報を提供してもらうということが増え、異分野で研究している学生同士ならではの相互作用が見られた。

### 3-2 個人授業

各学生が、個別に、授業内での提出物に関するフィードバックを受けたり、発表の準備をしたり、伸ばしたいスキルにフォーカスしたりできるように、週に1回40分、個人授業の時間を設けた。なお、クラス担任と副担任が、日々のクラス授業で指導をしている学生を分担し担当した。

#### 4 準正課活動・課外活動

本章では、4-1 で準正課活動、4-2 で課外活動の概要について述べる。

クラス授業の学習の補完を目的とし、準正課活動としてクラブ活動と講演会を実施し、課外活動として会話パートナーとの会話とグループでの漢字学習の機会を設けた。

##### 4-1 準正課活動

毎週金曜日3限を準正課活動の時間とし、全6週のうち、前半3週はクラブ活動に、後半3週は講演会にあてた。

##### 4-1-1 クラブ活動

6つのクラブ活動の選択肢の中から、学生が希望するものを1つ選び、それぞれの活動を行った。

表7 クラブ活動の内容

クラブ名	内容	受講者数
運動クラブ	ラジオ体操、太極拳、ヨガなどを通じて、ストレスや疲れを解放し、体調管理をする	5名
多摩クラブ	多摩地域のビデオを見て話し合い、井戸に関して詳しくなる	4名
テレビクラブ	日本のテレビで放映された短編ドラマやバラエティ番組を鑑賞し意見交換をする	5名
ペン習字クラブ	ボールペンで、ひらがな、カタカナ、漢字をきれいに書けるように練習をする	11名
お笑いクラブ	落語、コント、漫才といったお笑いの動画を鑑賞し、内容を確認したうえ、話し合いをする	3名
おすすめクラブ	日本語学習に役立つおすすめウェブサイト、アプリを紹介しあい、話し合う	4名

##### 4-1-2 講演会

プログラムの後半の金曜日3限に全3回実施した。具体的には、7月22日に日本舞踊中村流家元の中村梅彌氏・中村梅氏による「日本舞踊」、7月29日に能楽師の河村晴久氏による「能」、8月5日に近畿大学教授の堀田美保氏による「アサーティブネス」の講演会を行った。

## 4-2 課外活動

### 4-2-1 会話パートナー

希望した11名の学生に、日本語母語話者のパートナーを個別に紹介し、週に1回40分程度、様々な話題について会話の練習をする機会を提供した。

### 4-2-2 グループ漢字学習

毎週金曜日の授業前、7時30分から8時20分の50分間をグループ漢字学習の時間とした。中級レベルの漢字が読めるようになること、間違いやすい漢字に注意しながら正しく漢字が書けるようになることを目標に、担当教員1名が指導し、『Kanji in Context』第3水準の漢字を6回に分けて学習した。漢字の学習については習熟度に個人差があるため、コース開始前から各自で取り組むよう受講者全員に課題<sup>12</sup>を出したが、グループ漢字学習はその取り組みを支援するため、本年度より導入した。参加学生から「意味が分かるが訓読みや日本語の発音が分からないので良い勉強になる」「Gドキュメントに手書きで書く練習は初めてで面白い」などの意見が出た。

## 5 受講者による夏期コースへの評価

夏期コース終了時に受講者に対してアンケート調査を実施し、修了者31名中30名から回答が得られた。本章ではこの回答をもとに、受講者による夏期コースへの評価をまとめる。

### 5-1 全体的な評価

夏期コースへの全体的な評価は Excellent が 20 (66.7%)、Good が 9 (30%)、Fair が 1 (3.3%) であり、概ね満足しているようである。自由記述のコメントには「プログラムの構成はよく考えられており、学生をサポートする体制が整っている」「複雑な社会問題や抽象的な問題を日本語で適切な表現を使って議論する機会は、IUC でなければ得られない」「先生方の毎週のレッスンの丁寧さに驚かされた」など、プログラム構成や教師のパフォーマンスを評価するものが多く、さらにそのことから「プログラム期間中、自分のスキルが著しく向上したことを実感している」「新しいことを学び、以前の知識を固め、より高度な研究に自信を持って乗り出す準備ができた」などと自身の力の伸びを喜ぶものもあった。さらには「クラスメートの異なる分野の研究を学ぶことは、非常にユニークな学習体験であり、学術的な日本語学習のトレーニングは、日本関連の研究を行う学生にとって非常に有益なものだ」と、受講者同士の高め合いを指摘するコメントもあった。

一方、否定的なコメントとしては「漢字や文法の学習時間がもっと必要だった」「異な

るクラス間の交流の機会がもっとあればよかった」「このコースはオンライン学習用に設計されていない」というものがあった。

また、IUC の夏期コースを他の学生に薦めるとの回答は 29(96.7%)であり、所属先で積極的に受講を勧める、あるいは既に勧めたというコメントがあった。

## 5-2 オンライン学習の評価

オンライン学習についての質問項目と回答数は表 8 のとおりである。「対面授業との比較」において明らかなように、授業形態としてのオンライン学習は評価が低い。本稿 5-1 「全体的な評価」や 5-3 「クラス授業の評価」での否定的なコメントの多くもオンライン授業形態に関連したものであった。しかし表 8 の「全体評価」の Excellent と「予想との比較」の Better than expected がそれぞれ半数を超えていることから、一定の評価を得ていると言えるであろう。

表 8 オンライン学習についての質問項目と回答数

全体評価	対面授業との比較	予想との比較
Excellent 16 (53.3%)	Far superior 0 (0%)	Better than expected 17 (56.7%)
Good 1 (36.7%)	Slightly superior 1 (3.3%)	Roughly expected 12 (40%)
Fair 2 (6.7%)	Roughly comparable, with some demerits 12 (40%)	Worse than expected 1 (3.3%)
Poor 1 (3.3%)	Fair 5 (16.7%)	
	Somewhat inferior 10 (33.3%)	
	Far inferior 2 (6.7%)	

オンライン授業のための各種アプリケーションの使用については、Google ドキュメントの「クラスノート」が好評で、「共有画面を見る代わりに自分でドキュメントを開くことができる」「授業後の復習に役に立つ」「授業中や授業外での情報伝達に非常に有効だ」などのコメントが多数あった。一方で、「ノート PC の画面で Google ドキュメントと Zoom を並べて開くと、それぞれのアプリケーションのウィンドウが画面上で小さくなってしまい、クラスメートや先生の顔が見えにくくなってしまう」との意見もあり、受講者の環境整備にも配慮が必要である。このほか、ZOOM のチャット機能を有効活用すべきだとのコメントがいくつか見られた。

Google Drive の使用については、Excellent が 14 (46.7%)、Good が 14 (46.7%)、Fair が 2 (6.7%) であり、6 クラス中 4 クラスで使用した Google Classroom については Excellent

が11(57.9%)、Goodが8(42.1%)で、概ね高評価であったが、使用経験がなく困難を感じた受講者が数人おり、「わかりにくかった」「リンクが見つからない時があった」とのコメントがあった。

### 5-3 正課活動の評価

#### 5-3-1 クラス授業

クラス授業のOverall assessmentの回答数は、Excellentが21(70%)、Goodが7(23.3%)、Fairが1(3.3%)、Poorが1(3.3%)であった。教師の丁寧な指導やフィードバックを称賛するコメントの他に、教師による授業の進め方の違いを指摘するものがあった。

クラス分けについての回答はExcellentが19(63.3%)、Goodが7(23.2%)、Fairが4(13.3%)であった。4~6人というクラスサイズを評価するコメントが多いが、否定的なものとして、クラスの他の受講生と比較して自分を高く評価する、あるいは実力よりも上のクラスで挑戦したかったというものがあった。

難易度に関しては、授業内容、教材ともにJust rightが28(93.3%)と評価が高く、各クラスの指導内容や教材の難易度の調整は適切であったと言える。また授業の進捗についてもJust rightが27(90%)であった。ややペースが速く感じてもチャレンジすることで力の伸びが実感できるという肯定的なコメントもあった。

宿題の量についてはJust rightが27(90%)であった。2020年度の73.1%、2021年度の60%と比べると、量が多すぎるといった意見が減り、宿題や課題がオンライン体制に合わせて調整されてきたことがうかがえる。

#### 5-3-2 個人授業

学生からの反応は、63.3%がExcellent、30%がGoodであり、概ね高評価を得ている。「話し方のクセについて気づかせてくれた」「個々の学生の要望に対応してくれた」等のコメントがある。

### 5-4 準正課活動・課外活動の評価

#### 5-4-1 クラブ活動

クラブ活動の評価は、Excellentが46.7%でGoodが43.3%であった。「他のクラブにも参加してみたかった」「リラックスできた」等がある。オンラインでは授業外の他の学生との交流機会が限られているが、クラブ活動は交流の場にもなっている。

#### 5-4-2 講演会

講演会の評価は、Excellent が 40%、Good が 40%であった。内容については、「日本の伝統芸能について理解が深まりよかった」、「いわゆる日本文化についてだけでなく、話題のバリエーションがあってよかった」等のコメントがある。しかし、実施の時間について、「10:30 から 11:20 までだと思っていたが、実質 11:50 までだった」、「時差があるので夜に集中するのがつらかった」等のコメントが目立った。基本的に授業時間は 11:20 までという前提でいる学生と主催者側の方で理解の食い違いがあった。

#### 5-4-3 会話パートナー

アンケートでは 13 名から回答があり、Excellent が 10 名、Good が 1 名、Fair 2 名であった。しかし、本来は 11 名しか受けていないため、うち 2 名は誤って回答しているものと思われる。

#### 5-5 その他

アンケート結果から明らかになったことを 1 点付け加える。

授業外の時間に他の学生と話す機会があったとの回答は 17 (56.7%) にとどまった。本稿 2 章で述べた、受講者間の交流と授業外での日本語使用を促進するために設けた談話室の利用は芳しくなく、また希望者を対象としたグループ漢字学習、会話パートナーとの会話、卒業生との交流への参加者も多くなかった。受講者の多くがアメリカ、特に東海岸に居住<sup>13</sup>しており、日本との時差を考慮すると、授業時間以外の任意の活動への参加は負担が大きかったものと思われ、オンラインによる遠隔授業の限界であると言える。

### 6 おわりに

今年の夏期コースは、対面授業再開が期待されながらもやむなくオンラインでの開催となったが、授業やコース設計は高く評価され、また受講者の多くがコース期間中に達成感を得たことが明らかになった。これは、これまでのオンライン授業の知見が活かされたことと、教師と受講者が、オンライン授業や時差によるストレスを抱えながらも熱意をもって努力し続けたことによるものである。

対面授業と比べ評価が低くなりがちなオンライン授業を充実させるために導入され、工夫が重ねられてきた個人授業や講演会、クラブ活動、会話パートナーとの会話などは、学生からの評価が高く、対面授業再開後も継続して実施することを検討する価値があるものとなった。3 年間にわたって行われたオンライン授業の成果を今後のコース設計や運営に活かし、夏期コースをさらに充実したものとしたい。

## 注

- 1 各クラスの報告（本稿 3-1）は担任が、個人授業と準正課活動、課外活動の概要と評価（同 3-2、4-1、4-2-1、5-3-2、5-4）は副主任の佐藤が、その他は主任の橋本が執筆を担当した。
- 2 コース開始時は 32 名であったが、健康上の理由により 1 名が途中で離脱した。
- 3 <https://www.gather.town/>
- 4 <https://zoom.us/>
- 5 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（2020）『待遇表現』
- 6 [https://edu.google.com/intl/ALL\\_jp/workspace-for-education/classroom/](https://edu.google.com/intl/ALL_jp/workspace-for-education/classroom/)
- 7 小川誉子美・三枝令子（2004）『日本語文法演習 事柄の関係を表す表現-複文-』スリーエーネットワーク
- 8 [https://www.google.com/intl/ja\\_jp/forms/about/](https://www.google.com/intl/ja_jp/forms/about/)
- 9 WebKIC ([http://iucjapan.org/html/call\\_j.html](http://iucjapan.org/html/call_j.html))
- 10 [https://www.google.com/intl/ja\\_jp/docs/about/](https://www.google.com/intl/ja_jp/docs/about/)
- 11 <https://www.nhk.jp/p/72hours/ts/W3W8WRN8M3/>
- 12 『Kanji in Context』の Web アプリケーション「WebKIC」を利用可能とした。  
[http://iucjapan.org/html/call\\_j.html](http://iucjapan.org/html/call_j.html)
- 13 コース開始時の受講者の居住国は、アメリカ（29 名）、日本（2 名）、中国（1 名）で、コース期間中に 4 名が移動した。アメリカのうち東海岸居住者は 18 名であった。

## 参考文献

- 佐藤有理・佐藤つかさ・小峰克之・秋澤委太郎・結城佐織・青木惣一・大橋真貴子・橋本佳子・千田昭予（2020）「遠隔教育による上級日本語教育実践報告—ICT を活用したオンライン授業移行への対応と課題—」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第 9 号 pp.1-21  
<[http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020\\_SatoAri\\_et\\_al.pdf](http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_SatoAri_et_al.pdf)>
- 結城佐織・千田昭予・本間光徳・川西由美子・白石恵利奈・小峰克之・橋本佳子（2020）「2019-20 年度 夏期コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第 9 号 pp.80-102  
<[http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020\\_Yuki\\_et\\_al.pdf](http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2020_Yuki_et_al.pdf)>
- 千田昭予、橋本佳子、本間光徳、川西由美子、加藤陽子、後藤恵利、結城佐織（2021）「20-21 年度夏期コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年

報』第10 pp.69-89

<[http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021\\_Senda\\_et\\_al.pdf](http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021_Senda_et_al.pdf)>

大橋真貴子 (2021)「オンライン環境における『クラブ活動』」『アメリカ・カナダ大学連  
合日本研究センター教育研究年報』第10号 pp.14-23

<[http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021\\_Ohashi.pdf](http://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2021_Ohashi.pdf)>

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター (2013)『Kanji in Context [Revised Edition]  
(中・上級学習者のための漢字と語彙 [改訂新版])』The Japan times